

讚良郡条里遺跡（蔀屋北遺跡）発掘調査概要・IV
—大阪府四條畷市所在—



2002年3月

大阪府教育委員会

はしがき

讃良郡条里遺跡（藤屋北遺跡）は、四條畷市大字砂・藤屋に所在し、岡部川によって形成された自然堤防上とその後背湿地に立地する弥生時代から中世にいたる遺跡です。古墳時代においては、この遺跡の西方に河内湖岸がせまっていたものと推定されています。

今回の調査では、幅7m以上、深さ1.2mをはかる古墳時代前期から後期（5世紀後半から6世紀前半）の大溝が検出され、須恵器・土師器などの土器類、木製品、多数の玉類、鉄製品、石製品、ト骨、骨角製品、動植物遺存体等の遺物が大量に出土しました。2点の木製輪鏡は注目されるものがありました。

『日本書紀』などに四條畷市を中心とする生駒山西麓地域一帯に、馬飼の存在が記述されており、ここに牧が営まれていたと考えられています。当遺跡や近隣の遺跡から、朝鮮半島よりもたらされた陶質土器などが多く出土することからも、朝鮮半島からの渡来集団が馬の飼育や牧の経営に関与していたことが考えられています。このような背景の中で、出土した2点の輪鏡であり、今後の調査にも大いに期待が寄せられます。

調査に際しましては、地元の方々並びに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

平成14年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　言（凡　例）

- 1 本書は、門真寝屋川直送幹線下水管渠築造工事に伴って、大阪府教育委員会が実施した四條畷市砂・蓆屋に所在する讚良郡条里遺跡（蓆屋北遺跡）の発掘調査概要・IVである。
- 2 調査は、大阪府土木部の依頼を受け、文化財保護課技師宮崎泰史を担当者として、平成13年4月2日から6月7日まで実施した。
- 3 本書に使用した標高は、東京湾標準潮位（T. P.）で示した。また座標は、国土座標第VI座標系に基づいているもので、北は座標北を示す。
- 4 調査の実施にあたっては、砂・蓆屋自治会をはじめ四條畷市教育委員会、大阪府東部流域下水道事務所など多くの方々の協力をいただいた。
- 5 本書の作成にあたっては、小野山 節（京都大学名誉教授）、千賀 久（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館）、林 永珍（韓国・全南大學校）・野島 稔・村上 始・佐野喜美（四條畷市教育委員会）、浜田延充（寝屋川市教育委員会）、松山順一郎・別所秀高（東大阪市文化財協会）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、櫻井久之（大阪市文化財協会）木下 要（橿原考古学研究所）、橋本輝彦（桜井市埋蔵文化財センター）、西原雄大（長浜市教育委員会）、井上喜代志、増田 啓氏等の御指導及び後教示を得た。
- 6 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
- 7 出土木製品の保存処理は、元興寺文化財研究所に委託した。
- 8 本書の執筆・編集は宮崎泰史が行った。

目　次

- はしがき
例言（凡例）
第1章　調査に至る経過
第2章　調査の概要
第3章　まとめ

第1章 調査に至る経過

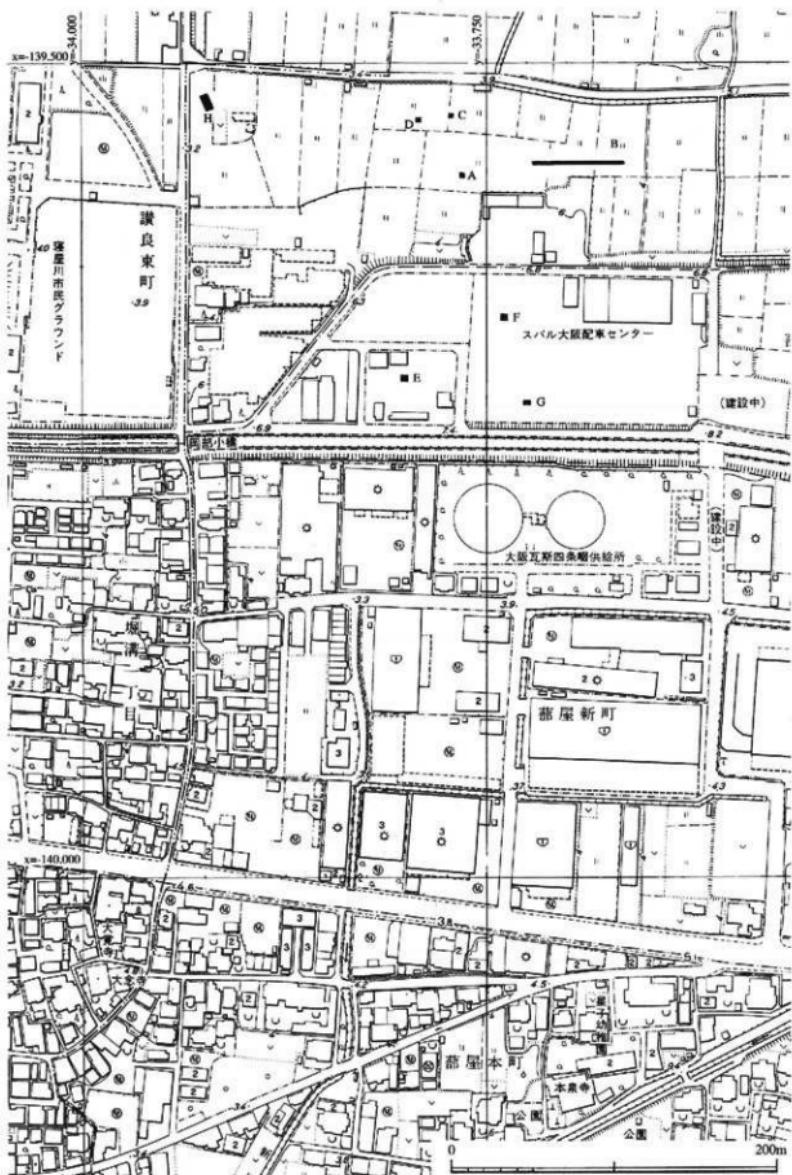
部屋北遺跡は、四條畷市大字砂・部屋に所在し、岡部川によって形成された自然堤防上とその後背湿地に立地する弥生時代から中世にいたる遺跡である。古墳時代においては、この遺跡の西方に河内湖岸がせまっていたものと推定されている。寝屋川市南部流域下水道・なわて水環境保全センター建設工事に伴う平成12年度の試掘調査（部屋北遺跡第2次試掘調査）によって、新規に発見された遺跡である。遺跡の一部は、寝屋川市から四條畷市にかけて広がる譲良郡条里遺跡に重複する（第1図）。

遺跡発見の経緯は、この地に、寝屋川南部流域下水道・なわて水環境保全センター建設が計画され、大阪府教育委員会では周知の譲良郡条里遺跡の範囲に該当することから、工事に先立って試掘調査（第1次試掘調査）を実施したことに基づく。なお、調査時の遺跡名は譲良郡条里遺跡<調査番号99070>で行っている。

第1次試掘調査は、2000年3月13日～4月11日にかけて、大阪府教育委員会が実施した。包含層及び遺構の有無とその形成時期、遺構面の枚数の確認と地山までの深度を明らかにすることを目的に、水処理施設（浄化槽）の建設予定地内北半部に5m四方のトレンチ1ヶ所（A地区）、3×50mのトレンチ1ヶ所（B地区）、3m四方トレンチ2ヶ所（C・D地区）を設定して行った。



第1図 周辺の遺跡 (1/10000)



第2図 調査区位置図 (1/3000)

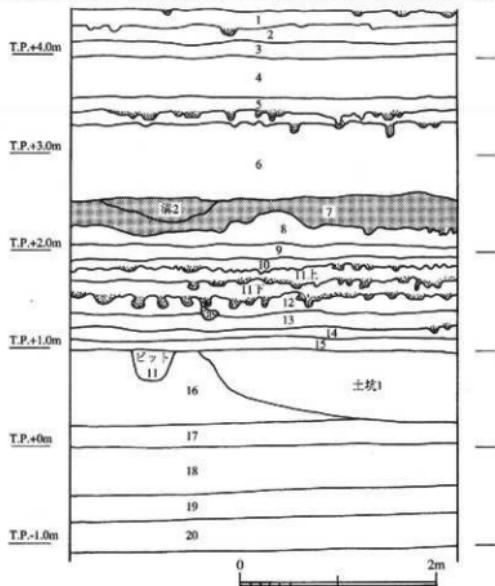
(第2図)。調査面積は193m²。なお、南半部については産業廃棄物等の残土が山積みとなっていたため、次年度にみおくられた。第1次試掘調査の結果、古墳時代の土坑・溝・柱穴、中世から近世の耕作面・溝・畦畔が検出され、集落遺跡が存在することが明らかとなった^{註1)}。水処理施設(浄化槽)予定地内南半部についても讃良郡条里遺跡の範囲をこえて更に、遺構面が広がることが予想されたので、人力掘削土量の算出データ・遺構面の確認・条里の時期・古墳時代遺構面の広がり・弥生時代遺構面の有無など、より詳細なデータを得ることを目的に、翌年度に試掘調査を実施した。

第2次試掘調査は、2000年11月8日～12月19日にかけて、大阪府教育委員会が実施した。調査は、水処理施設(浄化槽)の予定地内南半部に、5m四方のトレーニング(E地区)を設定した。調査途中で第1次試掘調査の結果によって、決めていた工事用道路建設に伴う改良工事によって影響を受けるレベルが、当初考えていたよりも1.75mも高いことがわかり、旧表土と調査対象遺構面のレベルを確認するために、更に水処理施設(浄化槽)の予定地に2ヶ所のトレーニング(F・G地区)を設定した。旧表土のレベルは、F地区ではT.P.+5.25m、G地区はT.P.+5.80m。

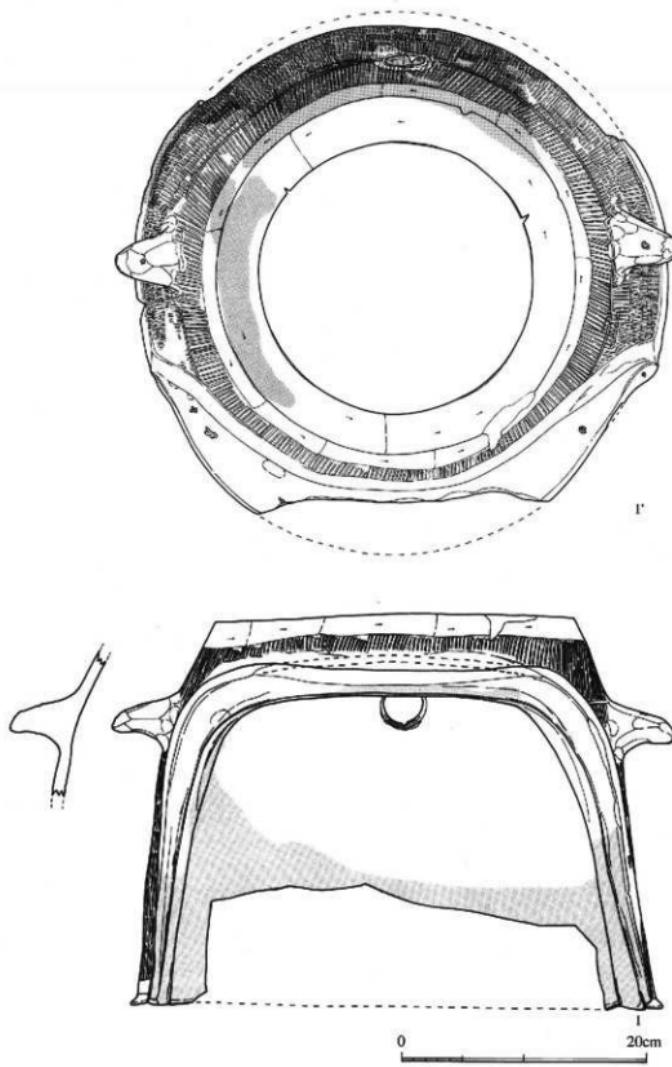
E地区の調査によって、14枚の遺構面を確認した。近世から古代では耕作にかかる足跡や畦畔・柱穴・溝などを確認している。

古墳時代(5～6世紀)では、2枚の遺構面を確認している。上面では溝や杭跡、下面では土坑・柱穴(柱材が残る)が検出された。土坑1は長さ約3.8m以上、幅約2.0m、深さ0.7mをはかる。北側は調査区外に延びているため、平面プランは不明である。坑中からは多量の須恵器・土師器とともに陶質土器や滑石製の双孔円板、滑石製の白玉、そして移動式かまど(第4・5図)やU字形板状土器製品(第6・7図)が出土した(図版1)。さらに炭層や灰層に混じって夥しい数の製塩土器(推定1500個体、重量約76kg)が同時に発見され、付近で粗塙を精製していた可能性が考えられた。

E地区の基本層序は、以下の通りである(第3図)。第1層は7.5Y1/5灰色砂質シルト層で、上面で人の足跡とウシの足跡を検出した。第2層は10Y1/5灰色粘

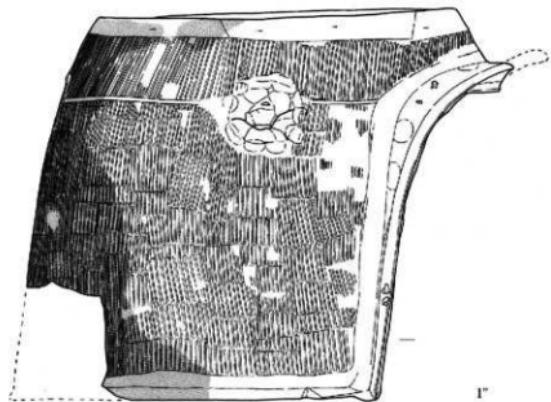


第3図 第2次試掘調査(E地区)西壁の基本層序模式図(1/50)

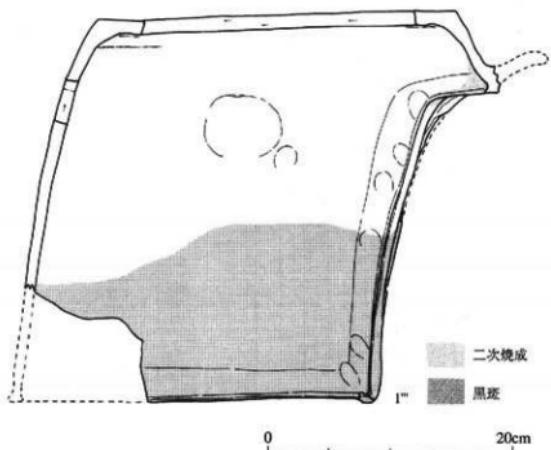


第4図 第2次試掘調査（E地区）土坑1 出土移動式かまど 上面・正面観（1/4）

質土層（レキを少し含む）で、上面で人の足跡とウシの足跡を検出した。第3層は10 G Y 4/1 暗緑灰色レキ混じり粘土（2~3ミリ前後の小レキを少し含む）層で、層中より瓦器挽・土師質・青磁片が出土している。第4層は砂・シルト・極細砂の互層。上面で、落ち込み（溝1とする）を確認した。第5層は10 Y 3/2オリーブ黒色粘土層。第6層は10 G Y 4/1暗緑灰色粘土層。



上面で足跡を確認する。層中より瓦器、土師質土器片が出土している。この層は厚く、下位はやや砂粒を含む。第7層は灰色砂層、上面でピット、溝2を検出した。溝2から12世紀の瓦器碗が出土した。第8層は暗青灰色粘質シルト（こまかに有機物を含む）、上面で珪畔と足跡を確認する。第9層は暗灰色粘質土。第10層は貝の粉末を粒状に含む。第11層は西側では上下に分層され、上下面で足跡を確認している。第12層は7.5Y3/2オリーブ黒粘質土（こまかに有機物を含む）、上面で足跡を確認する。第13層は10Y3/2オリーブ黒色粘質土（少し砂粒を含む）。第14層は10Y4/1灰色黑色粘質土（砂粒と黄色粒を含む）、上面で足跡を確認する。第15層は2.5GY4/1粘質土。第16層は2.5GY3/1粘質土。第16層以下は、自然堆積土である。

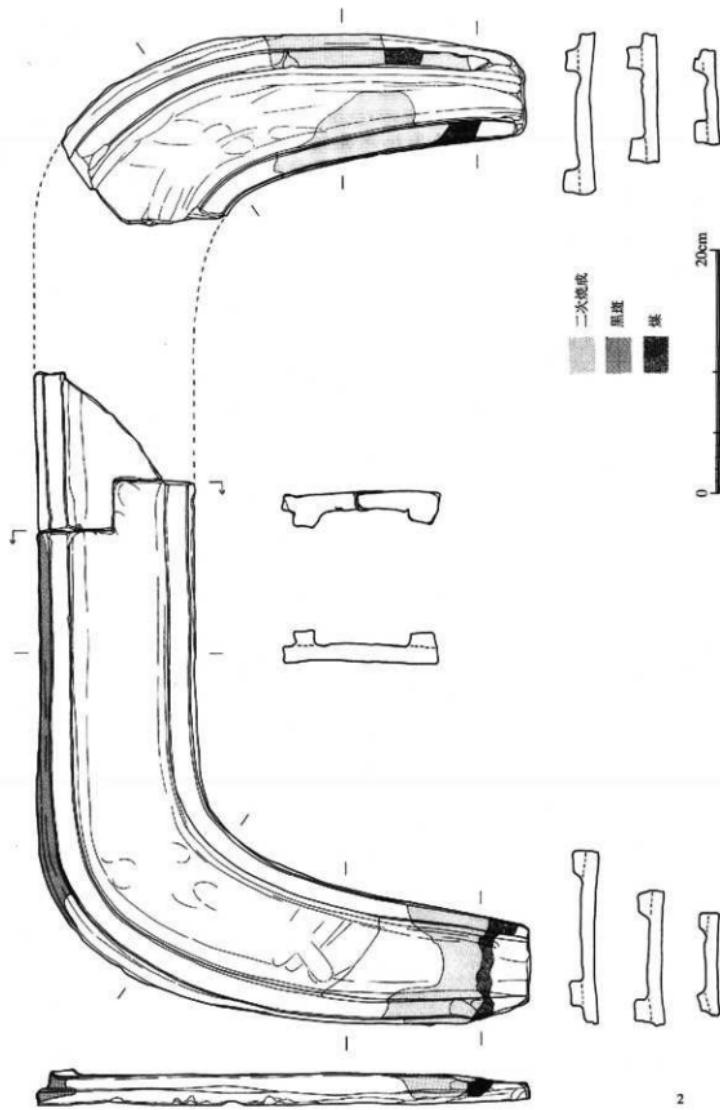


第5図 E地区 土坑1 出土移動式かまど 側面観・断面 (1/4)

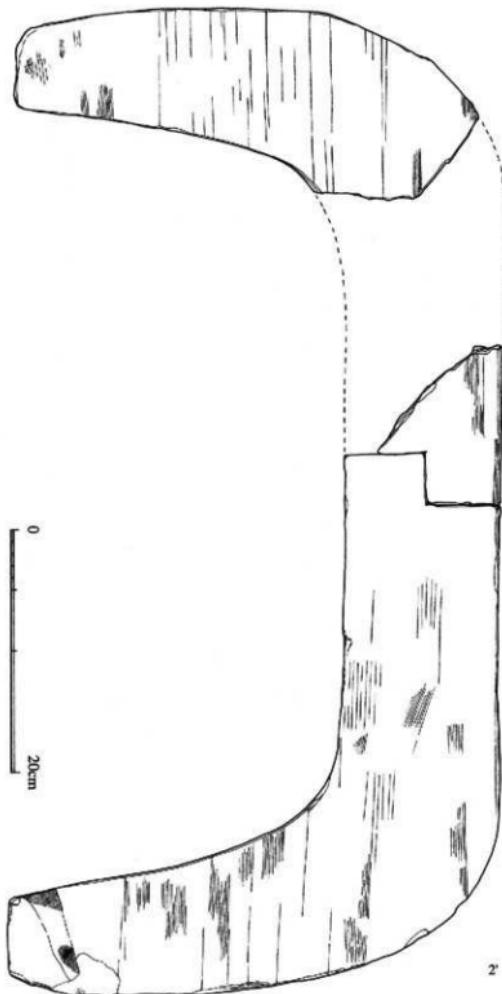
<土坑1出土遺物>

調査によって、5世紀後半～末の須恵器・土師器、夥しい製塙土器約76kg、個体数にして推定1500個にのぼる資料。また、移動式かまどやU字形板状土製品（図版9）、そして鳥足文タキメの認められる韓式系土器（陶質土器）なども出土している。

移動式かまど（第4・5図1）は、平底の瓶を倒立させたような形態を呈し、水平な天井部を

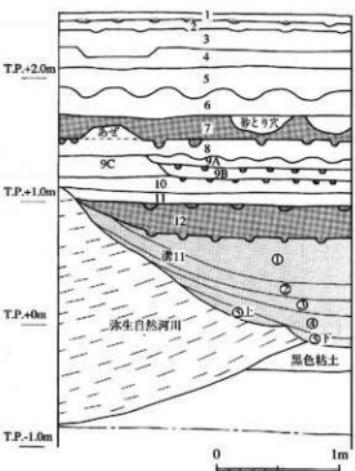


第6図 第2次試掘調査（E地区）土坑1 出土U字形板状土製品 表面（1/4）



第7図 E地区 土坑1 出土U字形板状土製品 裏面(1/4) 3.2×3.4cmの円形の煙り出し孔を穿つ。焚き口の裾部両側には、支脚状の低い小突起を付し、わずかに裾あきになる。背面については欠損のため、小突起の有無は不明。体部外面には縦方向の平行タタキメ、内面はナデ調整を施している。胎土中には雲母・角閃石が多量に含まれ、暗灰褐色を呈する、いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれるものである。

もつ。掛け口は径22cmの円形を呈する。天井部幅約29cm、基部幅43.3cm、高さ32cmをはかる。体部上位に1対の角状の把手が下向きに取り付けられている。掛け口は天井部で屈曲して、幅約3.6cmの平坦面をつくり、端部はヘラケズリ調整を施し、シャープな面をつくる。焚き口の底部分は、上部がやや上方に張り出す付け底である。焚き口の上部からつづく底は、基部に向かうほど張り出しの度合いが弱くなる。底高は先端部を一部欠損するが、掛け口高(天井部)を上回らないタイプ。底の上面・左右側面には、製作～乾燥時の支えとして使用した植物茎の痕跡と考えられる竹管文状のスタンプが認められた。その平面および断面の形状が一定していないことから、先端がやわらかい(植物質?)棒状のものを使用したものと考えられる。焚き口は、幅36.4cm、高さ25.2cmをはかり、立面形は肩のまるい台形をなす。焚き口の両側は端部を内外に肥厚させ、幅広の面をもつ。焚き口の背面には径



第8図 H地区 北壁の基本層序模式図（1/40）

長保寺跡^(註2)でも見出されている。

体部上位には端の収束しない水平方向の浅い沈線を巡らし、その位置に左右一対の牛角状把手を下向きに取り付けている。把手の下面側には、底の上面・左右側面に観察されたような、竹管文状のスタンプが各一ヶ所に認められた。煙り出しが・内面の上部には、煤の付着が認められた。また、赤変した部分が天井部内面と体部内面下半、焚き口周辺に認められた。掛け口の内外面に施されたヘラケズリ調整は、倒立して成形した時に生じた、はみ出した粘土を整えるためであろう。おそらく、かまどの製作方法は、把手の付け方や底部分の支え痕跡（竹管文状のスタンプ）から、平底の瓶のような器を倒立させ、焚き口・掛け口を開けて製作されたと考えられる（図版9a）。今回の資料と同様なタイプは寝屋川市長保寺跡^(註2)でも見出されている。

U字形板状土製品（第6・7図2）は、U字形を呈する厚さ1～2cmの板状の土製品。その片面の両縁に沿って、幅1～2cm、高さ1～2cmの断面台形の突帯を平行して貼り付けている。従来、「用途不明の生駒西麓産の土製品」^(註3)、「用途不明板状土製品」^(註4)と呼称され、国内では寝屋川市域でのみ出土例が報告され、約20点の破片が確認されている。用途については、かまどに関係する道具（組み立て式の移動式かまど・つくり付けかまどの焚口あるいは掛け口等の付属品）ではないかと考えられている^(註5)。今回の資料によって、全体の形がはじめて判明した。幅40.5～40.7cm、長さ40cmをはかり、左右の先端部は隅丸に仕上げられている。突帯のある面および側縁部は、丁寧なナデ調整で、平滑に仕上げられている。裏面も板状工具によると考えられるナデ調整によって仕上げられている。胎土はいわゆる「生駒西麓産」。製作時に平面をU字形の板状にづくり、突帯を貼り付け、焼成の前に中央で「相欠き」状に切り離して、焼成したものである。これは焼成の際の便宜と使用時の際の移動等を考慮したことと考えられる。

以上、第2次試掘調査によって、第1次試掘調査区を含めて、広い範囲に亘って古墳時代を中心とする集落の存在が明らかとなった。寝屋川南部流域下水道・なわて水環境保全センター建設工事に先立つ2回の試掘調査結果を受けて、四條畷市教育委員会は、奈良時代から室町時代の条里遺跡として登録されている讃良郡条里遺跡の範囲を拡大するよりも古墳時代の集落跡として、より遺跡の性格を明確化するため、讃良郡条里遺跡から独立した遺跡として、蔵屋北遺跡とした。

今回の調査は、なわて水環境保全センターに連結する門真寝屋川直送幹線下水管渠築造工事に伴う調査<調査番号01001>で、6m×10m(60m²)のトレンチ（H地区）を設定して、平成13年4月2日から6月6日までの間、実施した。

第2章 調査の概要

第1節 基本層序

層位は大きく、14層に分けられる（第8図）。第1層は砂礫を多く含む。層中から江戸時代の磁器片が出土している。第2層は淡黄褐色砂質土（2mm前後のマンガン斑を多く含む）、17世紀前半の唐津椀が出土している。第3層は灰褐色砂質土で、層中より瓦器椀、土師質Ⅲ、青磁椀片などが出土している。第4層は灰褐色粘質土（縦にスジ状に鉄分を含み、下面に帯状にマンガン斑を含む）で、鎌倉時代の瓦器椀、瓦質三足・土師質土器片が出土した。第5層は灰色粘質土（鉄分を縦にスジ状に多く含む）。第6層は灰色粘質土（砂混じり）。第7層は灰白色粗砂（粘土がラミナ状にブロックする）。第8層は暗青灰色シルト混じり粘土層。第5層～第8層は出土した土器から、鎌倉時代から平安時代の堆積と考えられる。第9層はA・B・Cの3つに分けられ、第9A層は暗青灰色粘質土（5mm以下の黄白色粒を少量含み、砂粒を多く含む）。第10層は暗青灰色粘土（5～10mm前後の灰色粘土のブロック、リンを無数に5mm以下の黄白色粒を多く含む）。第9層～第12層は出土土器から6世紀と考えられる。第13層は4世紀から6世紀の遺構面にあたり、層中から弥生時代後期後半頃の土器が出土した（弥生時代自然河川）。第14層は弥生時代自然河川の肩にあたる。

第2節 遺構

第2層及び第3層上面で幅0.2m前後、深さ0.2m前後の浅い溝が數条認められた。第4層上面で、南北方向に走る幅約1.0m、深さ0.15mの溝を検出する。第6層上面で歓溝。第7層上面で砂取り穴。第8層上面で畦畔と足跡が検出された。この畦畔は上層での溝と方位が異なる。第9A層・第9B層・第10層上面で足跡が検出された。第12層は砂層で、南側では厚さ0.28mをはかるが、北側ではほとんど認められなかった。これは、下層の遺構（溝11）の窪みに堆積したもの。なお、第12層上面でも足跡が見つかっている。第13層は占墳時代の遺構面にあたり、幅7m以上、深さ約1.2mの溝11と土坑4を検出している（図版4～8）。

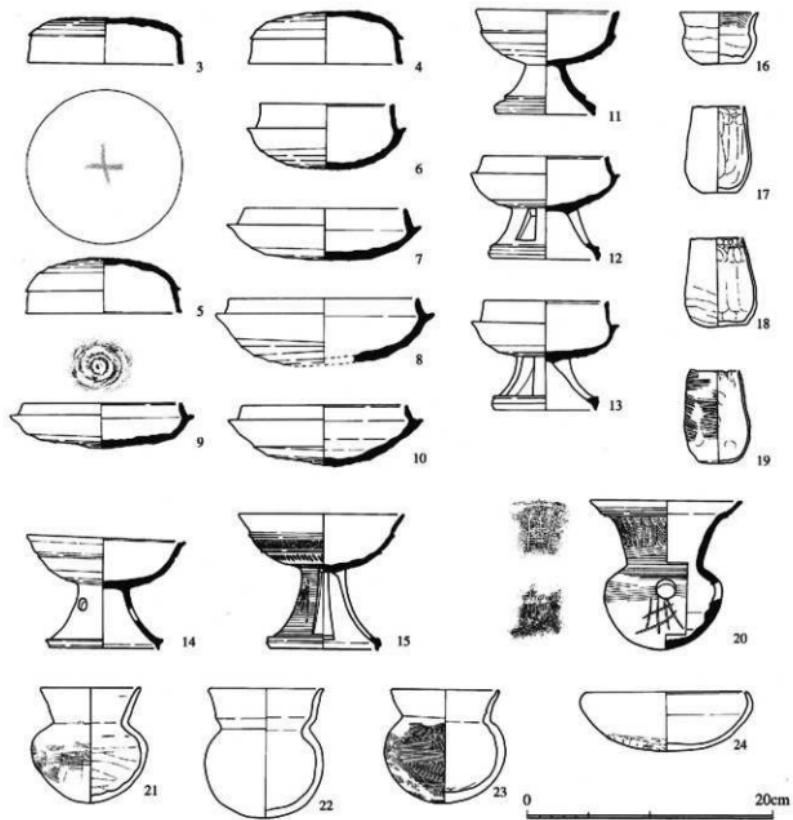
溝11の埋土は6つに大別される。層中に含まれていた土器から、1層は6世紀前半～後半、2層は5世紀末から6世紀前半、3層～5層上位は5世紀後半、5層下位は4世紀に比定される。

弥生自然河川の西肩は調査区外で、東肩は溝11によって大きく削平されているが、深さは約2.0mをはかる（図版8a）。

第3節 溝11出土遺物

本調査区から出土した遺物の大半は、溝11からである。須恵器・土師器・韓式系土器・木製品・土製品・玉類・石製品・金属製品・骨角製品・動植物遺存体等が出土している。

溝11の1層から、須恵器、土師器、U字形板状土製品、えぶり・たたり・横型杓子・加工木等の木製品、砥石、鐵鎌・直刀鎌・馬・猪・貝（タニシ・シジミ）・桃核等の動植物遺存体。2層から、須恵器、土師器、移動式かまと、U字形板状土製品、砥石、磨石、土製紡錘車・猪牙・鹿



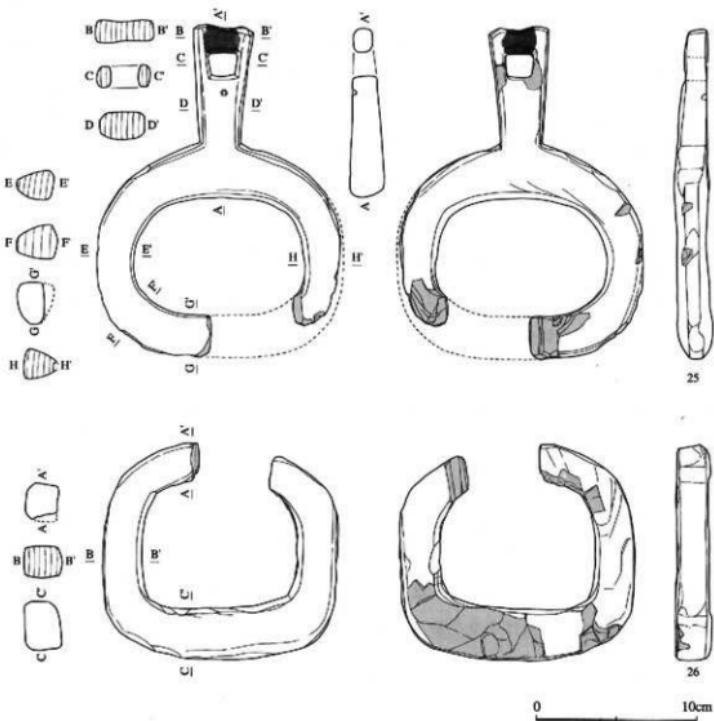
第9図 第1次調査（H地区）溝11及び第2次試掘調査（E地区）土坑1 出土土器（1/4）

角製品、滑石製白玉・双孔円板、ガラス玉、管玉、鉄製釣針、楕円鏡冶滓、土玉、琴柱・轡・有孔棒状・刻み入り木製品、ナスピ形鋸・横槌・木錘等の木製品、赤色顔料、卜骨、骨角製品、犬・鹿・猪・馬・鯛・貝等の動物遺存体、夥しい桃核やウリ・ヒョウタン。3層から、須恵器、土師器、移動式かまと、琴柱・輪鉈・建築部材・有頭状木製品、滑石製白玉・双孔円板、ガラス玉、砥石、製塙土器・陶質土器、鉄製曲刀子、馬・犬・猪・鯛等の動物遺存体、桃核やウリ・ヒョウタン。4層から、須恵器、土師器、滑石製白玉、製塙土器、ヒョウタン。5層下位から、弥生後期甕、庄内式土器、布留系甕・高坏、鹿角製柄、鉄鎌等、多種多様な遺物が豊富に出土している。

<土器>（第9図、図版10・11）

(3～5・74～78)は須恵器坏蓋で、(3～5)は3層より出土した。(3)は口径12.6cm、器高3.65cmをはかる。天井部は比較的平らで低く、口縁部はわずかに外反気味に下がり、端部は緩

やかな凹面をなす。口縁部と天井部との境の稜はやや丸みをもつ。外面の大半に丁寧な回転ヘラケズリ調整を施す。(4)は口径12.4cm、器高4.4cmをはかる。天井部は(3)に比べてやや丸みをもつが、口縁部と天井部との境の稜はシャープである。(5)は口径12.6cm、器高4.5cmをはかる。天井部外面に赤色顔料で「十」の記号をえがく。端部はわずかに内傾して、緩やかな凹面をなす。(74・76・77)は2層、(75・78)は1層より出土した。(74)は口径15.4cm、器高4.9cm、(76)は口径15.6cm、器高4.6cm、(77)は口径14.8cm、器高5.3cmをはかる。(75)は口径14.4cm、器高4.2cmをはかり、天井部外面の中央に赤色顔料を塗布している。(78)は口径15.0cm、器高4.7cmをはかり、天井部外面に赤色顔料が付着する。(6~10)は須恵器坏身で、(6)は3層、(7・8)は2層、(9・10)は1層より出土した。(6)は口径10.8cm、器高5.35cmをはかる。立ち上がりは内傾気味に高くのび、端部は内傾して面をもつ。底部はやや丸みをもち、外面の大半に回転ヘラケズリ調整を施す。(7)は口径13cm、器高4.25cmをはかる。(8)は口径15.5cm、器高5.4cmをはかる。(9)は口径12.6cm、器高3.7cmをはかる。内面に同心円タタキメがみとめられる。(10)は口径13.2cm、器高4.9cmをはかる。(11・14・15)は須恵器無蓋高坏。(12・13)は須恵器有蓋高坏。(11)は口径11.45cm、器高8.55cm、底径7.8cmをはかる。坏部は比較的深く丸みをもつ。坏部と口縁部との境の稜はやや丸みを帯びる。口縁部はやや斜め上方に立ち上がり、端部は内傾して緩やかな凹面を呈する。脚部はハの字状に短く開き、裾部外面に凸線を一条めぐらす。2~3層出土。(14)は口径12.7cm、器高9.0cm、底径8.8cmをはかる。脚部中位に、円形の透孔を3ヶ所に千鳥に穿っている。坏部内底面には磨耗痕が観察された。2層出土。(12)は口径10.1cm、器高8.4cm、底径8.8cmをはかる。透孔は3。2層出土。(13)は口径10.1cm、器高10.0cm、底径8.2cmをはかる。透孔は3。2~3層出土。(15)は口径13.3cm、器高11.0cm、底径8.6cmをはかる。透孔は4。脚部外面にヘラ記号を施す。2~3層出土。(16)土師器小型鉢は口径6.1cm、器高4.3cmをはかる。内面に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。2層出土。(17~19)は製塙上器で、(19)のものは第2次試掘調査(E地区)土坑1より出土したものである。外面はタタキメ調整。(17・18)は口径4.1~4.2cm、器高7.0~7.2cmをはかる。外面はナデ調整、内面は指ナデや指おさえによる痕跡がよく残る。(17)は3層、(18)は4層から出土した。須恵器甌(20)は口径12.0cm、器高12.1cm、体部最大径は9.5cmをはかる。体部中位から口頸部外面はカキメ調整後、口頸部に櫛描波状紋をめぐらす。ヘラ記号を口頸部外面と体部外面下半に施している。2層出土。(21~23)は土師器小型丸底壺。(21)は3層出土で、口径7.9cm、器高9.4cm、体部の最大径はやや上位で9.35cmをはかる。口頸部外面は横ナデ調整、体部内面はナデ、外面はハケメ後にナデ調整を施す。(22)は3~4層出土で、口径9.0cm、器高10.5cm、体部の最大径は9.5cmをはかる。口頸部外面は横ナデ、体部外面はナデ調整を施す。(23)は5層下位より出土した。口径8.5cm、器高9.2cm、体部の最大径は9.7cmをはかる。口頸部外面は横ナデ、体部外面はハケメ調整を施す。(24)土師器坏は3層出土で、口径13.0cm、器高4.8cmをはかる。口縁部外面は横ナデ、体部内面および外面上半はナデ、下半は静止ヘラケズ



第10図 第1次調査（H地区）溝11 出土木製輪鎧（1/3）

り調整を施す。

なお、(図版11-79)は鳥足文タタキメの認められる須恵質の瓶である。口径8.9cm、残存高8.4cmをはかる。3層より出土した。体部外面に、右開きの鳥足文タタキメが横方向に連続的に施されている。体部上半部に横ナデ調整が施され、残存する範囲では2段にわたってタタキメがみられる。北河内地方では、大東市メノコ遺跡^(註6)について2例目となる。この種のタタキメをもつ土器は、朝鮮半島の南西部、すなわち百濟地域との係わりをもつ韓式系土器であることが明らかにされている^(註7)。その他にも、平行・正格子・斜格子・繩席といった鳥足文以外のタタキメをもつ韓式系土器も出土している。

<土製品> (図版12a-d)

土製品には、U字形板状土製品、移動式かまど、土錐、紡錘車、用途不明板状土製品などがある。第2次試掘調査時で出土したU字形板状土製品 (第6・7図2)と同じものが、今回の調査でも10数点 (図版12a-80~82)ほど出土した。いずれも胎土に角閃石を多く含み、チョコレー

ト色をした「生駒西麓産」のものである。(80・82)は2層から、(81)は1層から出土した。なお、(図版12a・83)は第1次試掘調査時の古墳時代包含層(第9層)より出土したものである。(80)は幅が15.6cmもあり、(第6・7図2)のものよりも一回り大型であるが、板状部の厚さはほぼ同じ。(図版12c・84・85)はU字形板状土製品に比べてやや粗いつくりで、板状部の長辺の一端をL字形に折り曲げている。(84)は2層、(85)は3層から出土した。幅は13.0~14.8cm、厚さ1.5cm前後をはかる。長さについては欠損のため不明である。今のところ用途不明板状土製品として表現のしようがないものである。

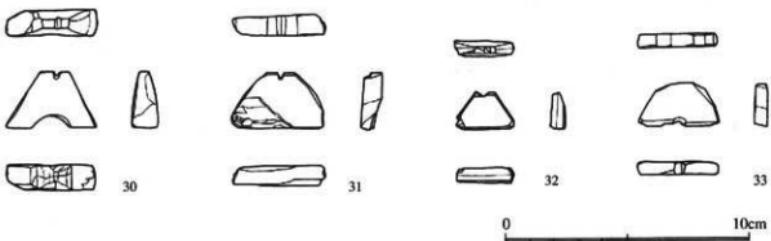
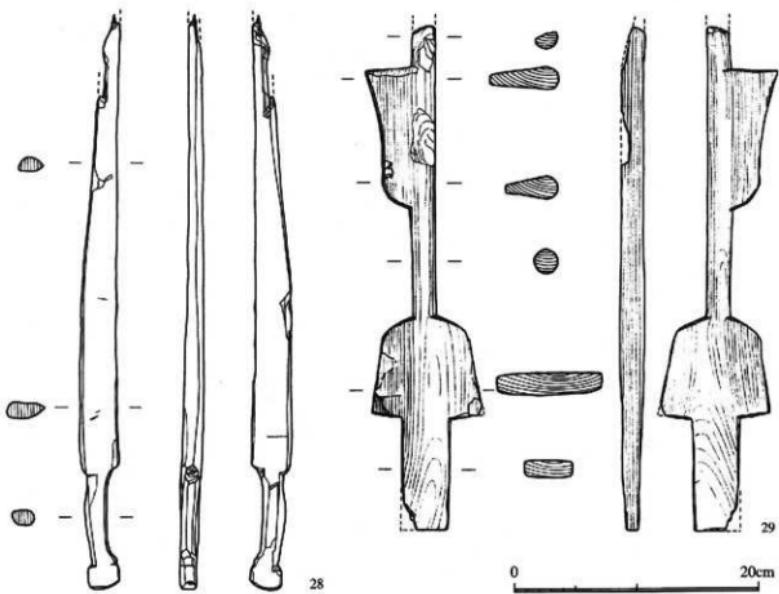
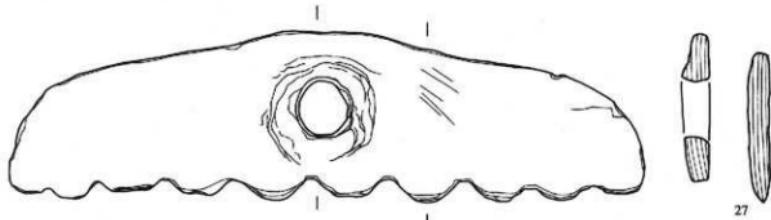
(図版12b)は移動式かまどである。いずれも土師質で、少なくとも4タイプがある。(86)は生駒西麓産で、つくりは第4・5図1と似ているが、外面の調整はナデ。(87)は掛け口がドーム状で、背部には注ぎ口に似た煙り出しを付加する。内面全体に煤が付着している。(88)は砂粒を多く含み、焚き口と付け庇との間隔が広いタイプ。他にタタキメを施すものや体部に埴輪に見られるようなタガ状の突帯をめぐらすものも破片で出土している。(86・87)は2層から、(88)は3層から出土した。(図版12d)は土師質の紡錘車と土錐。紡錘車(89)は断面台形を呈し、径4.3×4.2cm、厚さ1.8cmをはかる。2層から出土した。土錐(90)は3層からの出土で、現存長は7.7cm、厚さ約3.8cmをはかる。

<石製品> (図版12f)

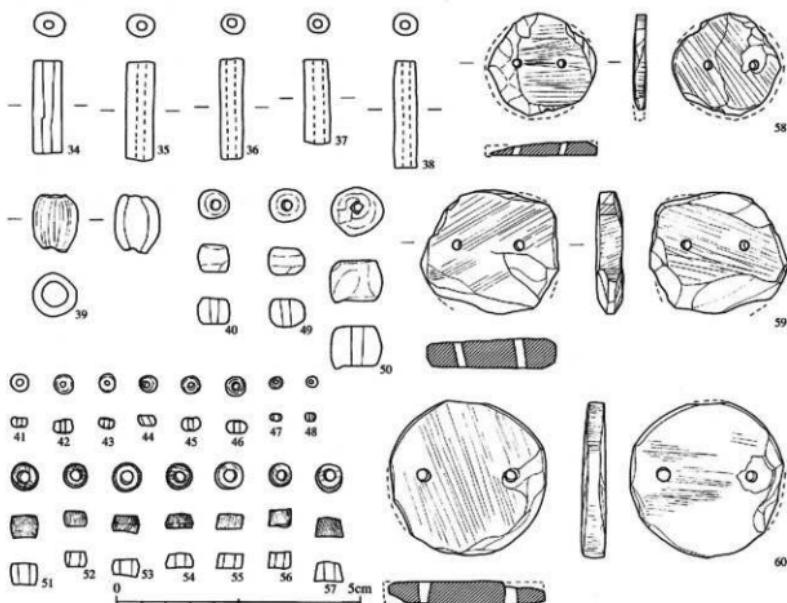
砥石(91~97)、磨り石(98)、叩き石(99)などが出土した。(95)は径3.4×3.55cmの円形で、厚さ1.7cmをはかり、中央に径0.7cmの孔を穿つ。側縁全体に擦痕が観察される。携帯用砥石と考えられる。(91)は1層、(92・93・96~98)は2層、(94・95・99)は3層より出土した。

<木製品> (第10・11図、図版13・14)

木製品はコンテナして約48箱出土している。えぶり・ナスピ形鐵・横樋・木錐・たたり・琴柱・鞘・横型杓子・刀形・火鏡臼・輪燈・有孔棒・刻み入り木製品・有頭棒・建築部材・加工木等である。輪燈(25・26)は3層から出土した(図版6b)。(25)は高さ20.6cm、幅15.65cmをはかる。輪部は平面梢円形で、内径縦7.3cm、横10.6cmで、断面梯形を呈し(内側が広い)、幅2.3~2.6cm、厚さ1.8~2.2cmをはかる。柄部は上開きで、断面は隅丸長方形を呈し、長7.3cm、上方幅3.8cm、下方幅2.55cm、厚さは1.3~1.9cmをはかる。柄部の上方に1.5×1.8cmの横長方形の孔(鎧軛孔)をあけている。ここに鎧軛(皮紐)を装着して鞍に連絡したものである。柄部上縁及び鎧軛孔の内縁上部は、著しく磨耗しており、鎧軛が結ばれていた痕跡と考えられる。鎧軛孔や輪部の摩滅の痕跡から、乗馬する人の右足を乗せるものと考えられる。表面は丁寧に調整されており、輪部を削り込んで断面梯形にすることで、軽く、また重量のかかり具合を考慮して、柄部の基部を厚くするなど、実用品として行き届いた細工をしている。(25)の鎧軛孔のやや下に径0.3cm、深さ0.3cmの断面描鉢形の穴をあけている。これは前面を意識したための印であろう。材質はカシ(アカガシ亜属)。木取りは柾目^(註8)である。(26)は柄部を欠き、残存高は13.3cmをはかる。輪部は平面長梢円形で、内径縦8.1cm、横9.7cmで、断面隅丸長方形を呈し、



第11図 第1次調査（H地区）溝11 出土木製品（1/2、1/4）

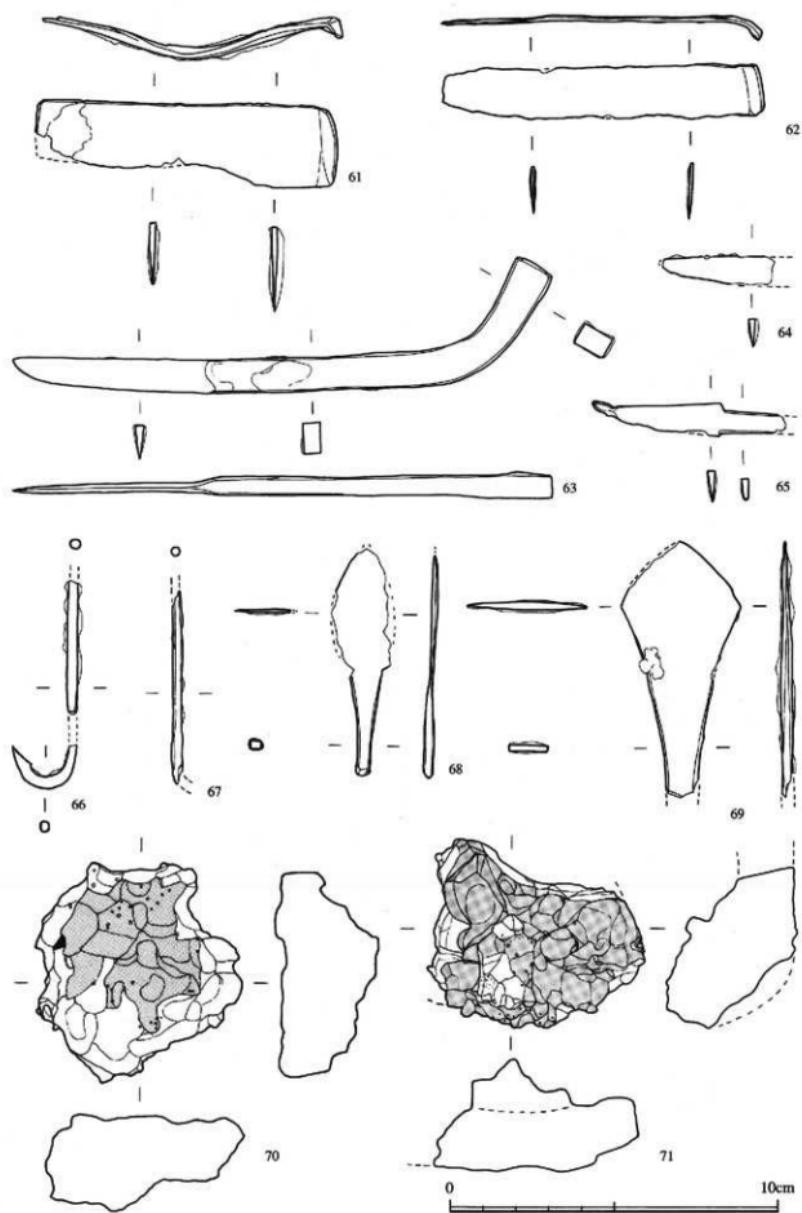


第12図 第1次調査(H地区)溝11 出土玉類(1/1)

幅2.3～2.6cm、厚さ1.8～2.2cmをはかる。(25)に比べて形態的に洗練されておらず、整形も粗い。材質はカシ(アカガシ亜属)で、木取りは柾目である。えぶり(27)は1層から出土した(図版4b)。長13.9cm、幅51.8cm、着柄部の厚さ2.3cmをはかる。刀形木製品(28)は、切っ先部分を欠損し、現存長47.2cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmをはかる。刃を内反りに表現する刀形木製品は類例がなく、珍しい資料といえる。出土層位は、北側の側溝掘削中に出土したため、限定できないが1層または2層と考えられる。たたり(29)は1層より出土した。先端部を欠損し、現存長は41.4cm、最大幅8.9cm、厚さ1.9cmをはかる。琴柱(30～33)は4点あり、(30・32)は2層から(31・33)は3層から出土した。(32)は2次的に火を受け、炭化している。火鑓臼(図版13～106)は現存長2.0cm、幅0.9cm、厚さ0.7cmをはかる。側面には断面V字形の刻みが入れられている。2次的に火を受け、炭化している。2層より出土した。木鍤は3点出土している。(107)は完存するもので、2層より出土。長さは16.7cmをはかる。横型杓子(108)は1層より出土。身の一端に、断面円形の柄がつく。柄と身は一本で作られ、いま身の先端部と側縁の一方を欠損する。現存長は44.3cm、現存幅12.0cmをはかる。横槌(109)は2層より出土した。長さは38.8cmをはかる。

<玉類> (第12図、図版15b・c)

管玉(34～38)は長さ1.75～2.2cm、径0.4～0.6cmをはかる。孔は両面から穿孔している。



第13図 第1次調査（H地区）溝11 出土鉄製品（2/3）

色調は緑灰色で、材質は緑色凝灰岩と思われる。すべて2層より出土した。ガラス珠玉(39)は長1.15cm、厚さ0.9cmをはかる。色調は鉛色を呈し、表面に縱方向のヒビ割れが観察される。2層出土。ガラス小玉(40)は2層出土で、径0.6cm、厚さ0.6cmをはかり、色調は濃紺色。(41~48)はガラス珠玉で、径は0.4~0.2cm、厚さ0.3~0.15cmをはかる。(44・48)は3層から、他は2層より出土した。色調はコバルトブルー(41・46・48)、淡緑色(42)、白色(43)、不透明な赤色(44)、暗緑灰色(45)、薄緑色(47)を呈する。

(51~57)は滑石製臼玉で、2層中より出土した。径は0.45~0.65cm、厚さ0.1~0.45cmをはかり、色調は緑灰色を呈する。形状によって臼形(51・52)、算盤形(53・54)、円筒形(55・56)、台形(57)の4タイプに分けられる。(58~60)は滑石製双孔円板で、大きさによって大中小に分けられる。(58)は1層出土で、径2.2×2.3cm、厚さ0.3cmをはかる。色調は暗緑灰色。(59)は2層出土で、径2.6×2.8cm、厚さ0.6cmをはかる。色調は緑灰色。(60)は3層出土で、径3.15cm、厚さ0.5cmをはかる。色調は淡緑灰色を呈する。

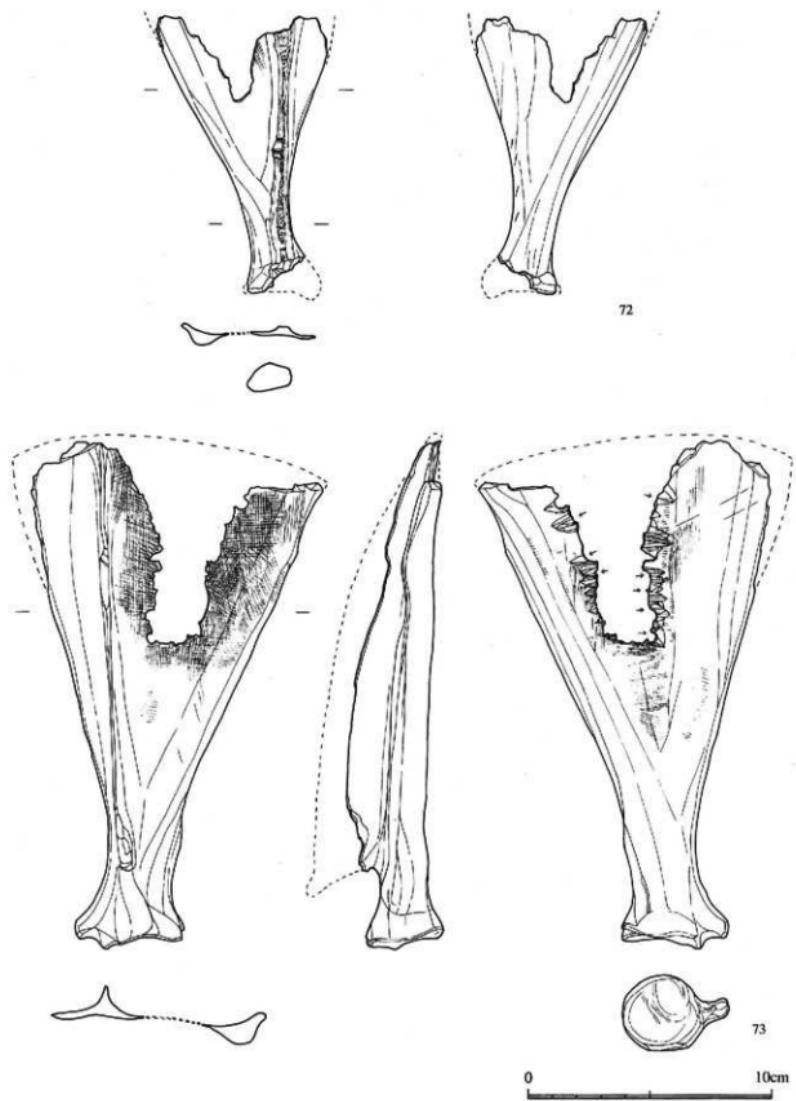
(49・50)は土玉で、外面の色調は2.5Y2/1黒色、断面は2.5Y6/2灰黄色を呈する。2層より出土した。(49)は径0.75×0.65cm、厚さ0.55cmをはかる。(50)は径1.1×0.95cm、厚さ0.85cmをはかる。

〈鉄製品〉(第13図、図版12e)

鎌、刀子、釣針、鉄鎌などの他に楕形鍛冶滓が出土している。(61・62)は直刀鎌で、(61)は残存長9.1cm、幅2.6cm、厚は0.5cmをはかる。(62)は残存長9.7cm、幅1.7cm、厚は0.2cmをはかる。(63~65)は刀子で、(63)は完存する曲刀子で、柄部までも鉄で作り出している。長16.3cm、幅1.0cm、刃長5.8cmをはかる。(64)は残存長3.4cm、幅0.9cm、厚0.2cmをはかる。刃部の先端部のみ残存している。(65)は残存長5.8cm、幅1.0cm、厚2.5cmをはかる。刃部は折れ曲がっている。(66・67)は釣針で、(66)は残存長6.3cm、径0.3cmをはかる。(67)は残存長5.9cm、径0.25cmをはかる。針先を失う。(68・69)は鉄鎌で、(68)は残存長6.9cm、幅1.9cm、刃厚は0.1cmをはかる。(69)は残存長7.8cm、幅3.6cm、刃厚は0.3cmをはかる。(70・71)は楕形鍛冶滓。質は緻密で、外面に気孔・木炭痕が少しあり、上面には溶解した黒色ガラス質滓が付着する。なお、1層から(61・69)、2層から(64・65・66・67・70・71)、3層から(63)、5層下位から(62・63・68)が出土した。

〈骨角製品〉(第14図、図版12g・15a)

ト骨(72・73)は、いずれもニホンジカの肩甲骨を利用したもので、けんこうまく肩甲棘は除去されている。(72)は残存長11.4cm、残存幅10.0cm、最大厚1.7cm。間接上結節は未癒着で、若獣の個体のものである。鑽や焼灼痕は認められないが、肩甲棘を除去していることから、ト骨の未使用品と考えられる。2層より出土。(73)は棘下窓の一部を欠失するものの、保存状態は良好といえる。間接上結節は完全に癒着しており、成獣の個体のものである。残存長20.8cm、残存幅11.9cm、最大厚3.9cmをはかる。2層出土(図版5c)。棘下窓及び肩甲下窓のほぼ全面に、鋭利な刃物によ



第14図 第1次調査（H地区）溝11 出土骨（1/2）

るこまかなかぎり痕（光沢をおびる）が観察された。これは骨表面を削ることにより焼灼面を滑沢・薄平にしようという意図がはたらいたのであろうと思われた。鑽は一側面を欠損しているた

め、その平面形状は明らかではないが、紡錘形を呈していたものと考えられ、少なくとも二列以上重影りこまれている。隣り合う鐵の重複関係から、上から下に向かって連続して重影り込み、その底面に焼灼をほどこしている。焼灼痕は8ヶ所（図の矢印は黒色に変化した部分）に認められた。他にニホンジカの角素材や半加工品、製品などが出土している（図版12-100～105）。

第3章 ま と め

『日本書紀』（720年完成）などに四條畷市を中心とする生駒山西麓地域一帯に、馬銅の存在が記述されており、ここに牧が営まれていたと考えられる。周辺の調査では、5～6世紀にかけて、馬骨・馬齒、製塙土器が多く検出されている。さらに、朝鮮半島からもたらされた陶質土器などが伴うことからも、朝鮮半島からの渡来集団が馬の飼育や牧の経営に関与していたことが考えられる。なかでも、藤屋北遺跡の場所は、古墳時代には河内湖の岸辺にあたることから、交易や牧場に関連した重要な施設が置かれていた可能性がある。このような背景の中で、乗馬・調教のために使用された馬具のひとつが、今回見つかった古墳時代中期の輪鎧である。鎧の表面は丁寧に調整されており、輪部を削り込んで断面梯形にすることで、軽く、また重量のかかり具合を考慮して、柄部の基部を厚くするなど、実用品として行き届いた細工をしている。古墳時代後期（6世紀中頃）までの古墳から出土する馬具類の中で、鎧が欠けている事例が多いのは、古墳への副葬品を含めて5世紀後半～6世紀前半には、多くの木製の鎧が使われていた、ということを今回の木製輪鎧は示していると考えられる。また、今回全体の形が明らかとなった「U字形板状土製品」と同様なものは、韓国全羅南道光州廣域市の月田洞遺跡^(註9)でも出土している。朝鮮半島の南西部、百濟地域との関わりが深い韓式系土器であると明らかにされている「鳥足文タタキメ土器」とともに、朝鮮半島からの渡来集団の故地を解き明かしていく上で、重要な資料の一つといえる。今後の調査の進展が期待されるところである。

（註1）佐久間貴士・横田 明 2001「諱良都条里遺跡」「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報4」大阪府教育委員会

（註2）濱田延充編 1993「長保寺遺跡－御伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－」寝屋川市教育委員会

（註3）西口陽一編 1991「諱良都条里遺跡発掘調査概要・II」大阪府教育委員会

（註4）濱田延充 2001「用途不明板状土製品」について『韓式系土器研究Ⅳ』韓式系土器研究会

（註5）濱田延充 2001「長保寺遺跡出土の移動式かまと」『韓式系土器研究Ⅴ』韓式系土器研究会

（註6）中達健一 1993「大東市メノコ遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究Ⅳ』韓式系土器研究会

（註7）出中清美 1994「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究V』韓式系土器研究会

竹谷俊夫 1995「日本と朝鮮半島出土の鳥足形タタキ文土器の諸例－その分布と系譜－」「西谷清治先生古希記念論文集」勉誠社

櫻井久之 1998「鳥足文タタキのある土器の一群」「大阪市文化財協会研究紀要」創刊号 （財）大阪市文化財協会

（註8）報道提供の際には、木取りを板目としていたが、板目に訂正する。

（註9）林永珍・趙鏡先・徐賢珠 1996「光州 月田洞 遺跡」全南大學校・光州廣域市

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さらぐんじょうりいせき（しひみやきたいせき）はっくつちょうさかいようよん
書名	讃良郡条里遺跡（部屋北遺跡）発掘調査概要・IV
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮崎泰史
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2002年3月

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村 遺跡番号					
さらぐんじょうりいせき (しひみやきたいせき)	しじょうなわてし とみや・すな	27229	34° 44° 29°	135° 37° 48°	平成13年4月2日から 6月7日	60m ²	門真寝屋 川直送幹 線下水管 渠築造工 事
讃良郡条里遺跡 (部屋北遺跡)	四條畠市 部屋・砂	7 (51)					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
讃良郡条里遺跡 (部屋北遺跡)	集落跡 生産域	弥生時代 古墳時代 室町時代	溝、土坑、ピット、 畦畔、畝溝、自然 河川		須恵器、土師器、韓 式系土器、製塙土器、 移動式かまど、U字形 板状土製品、埴輪、 木製品（輪鉗・刀・ たたり・えぶり・ 火きり臼・琴柱・ 刻み入り木製品・ ナスピ鉤・建築部材・ 有頭状木製品など）、 石製品（砾石・ たたき石・磨石）、 土製筋織車、 金属製品（鉄鎌・直 刃鎌・刀子）、卜骨、 骨角製品（鹿角製垂 飾・鹿角製柄など）、 ガラス玉（栗玉・ 小玉・粟玉）、 滑石製（双孔円板・ 白玉など）、綠色凝 灰岩製管玉、動植物 遺存体（馬・牛・猪・ 鹿・犬・竜・蛇・ 鳥・鮫・鰐・アカニ シ・蝶・桃核・瓢箪・ 瓜など）、赤色顔料、 弥生後期窯、庄内式 土器、布留式土器		古墳時代前期か ら後期の大溝か ら多種多様な遺 物が大量に出土

図 版

図版 1 萩屋北遺跡第2次試掘調査 E地区 古墳時代 遺構



a. 土坑1 上層 製塙土器出土状況（東から）



b. 土坑1 下層 遺物出土状況（上方が東）



a. 第3層上面（南から）



b. 第8層上面（南から）



c. 第9層上面（南から）



a. 第10層上面（南から）



b. 第12層上面（南から）



c. 第13層上面（南から）



a. 1層 遺物出土状況（南から）



b. 1層 えぶり（北から）



a. 2層 遺物出土状況（南から）



b. 2層 U字形板状土製品出土状況（南から）



c. 2層 ト骨出土状況（南から）



d. 2層 移動式かまと出土状況（南から）



e. 2層 遺物出土状況（南から）



a. 3層 遺物出土状況（南から）



b. 3層 木製輪轂出土状況（南から）



a. 4層 遺物出土状況（南から）



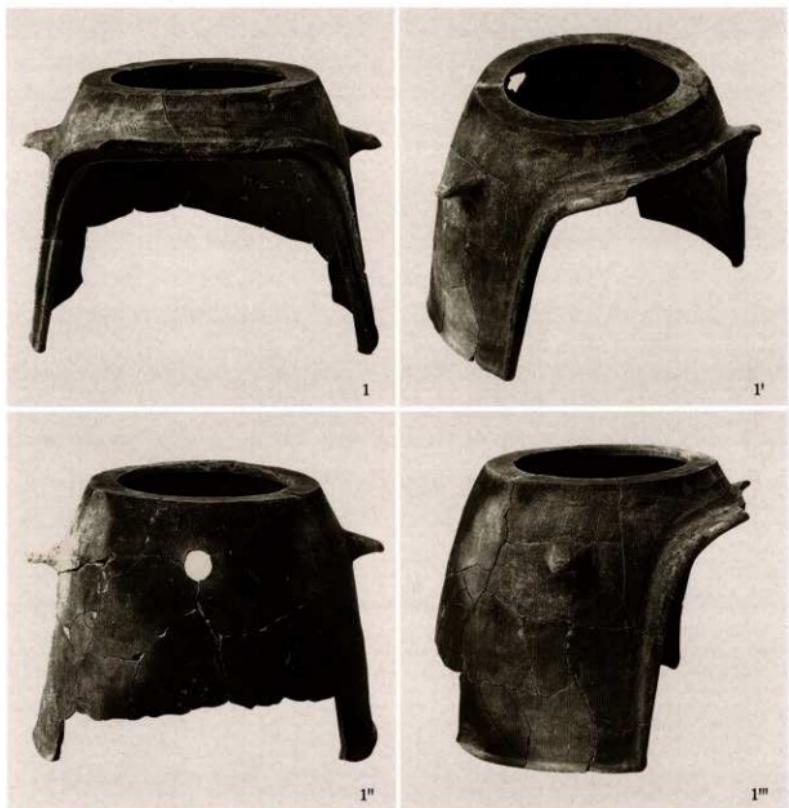
b. 5層 遺物出土状況（南から）



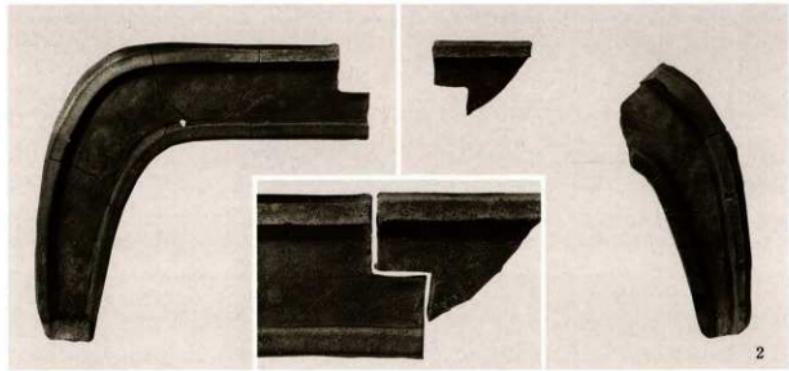
a. 自然河川 全景（南から）



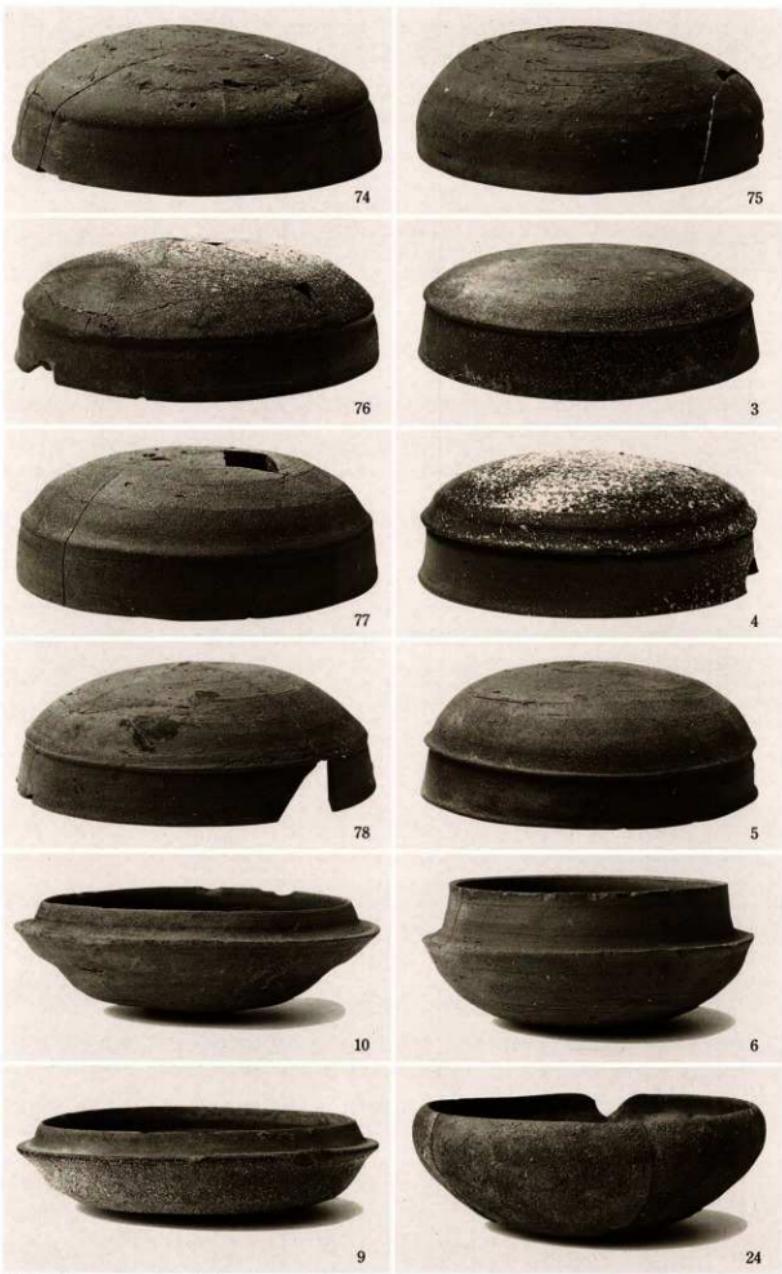
b. 溝11 南側土層断面（北から）



a. 土坑 1 移動式かまど



a. 土坑 1 U字形板状土製品



須恵器壺蓋 (3~5・74~78)・壺身 (6・9・10)、土師器壺 (24)
(9・10・75・78) は1層、(74・76・77) は2層、(3~6・24) は3層出土。



18



22



23



21



79

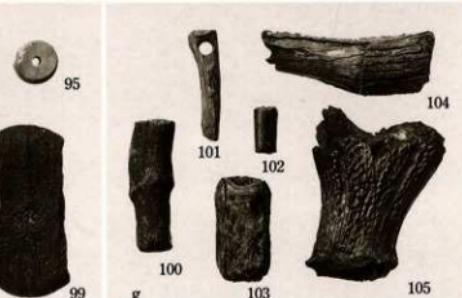
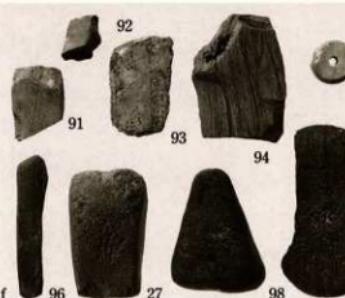
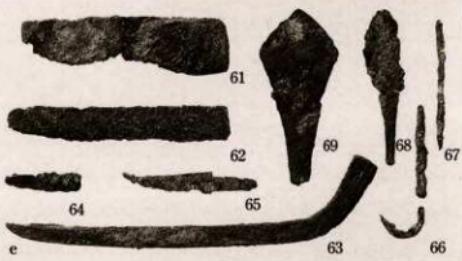
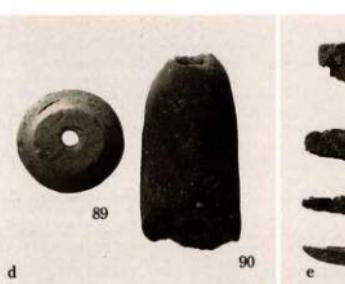
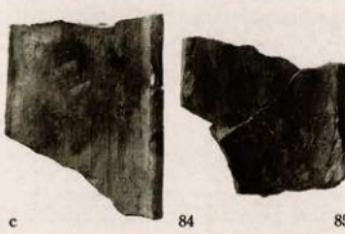
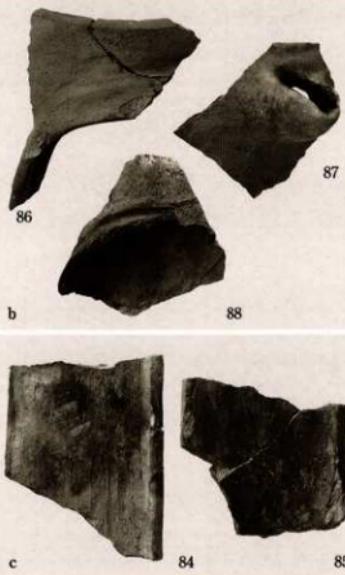
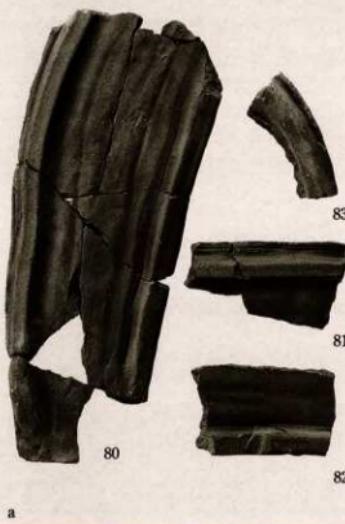


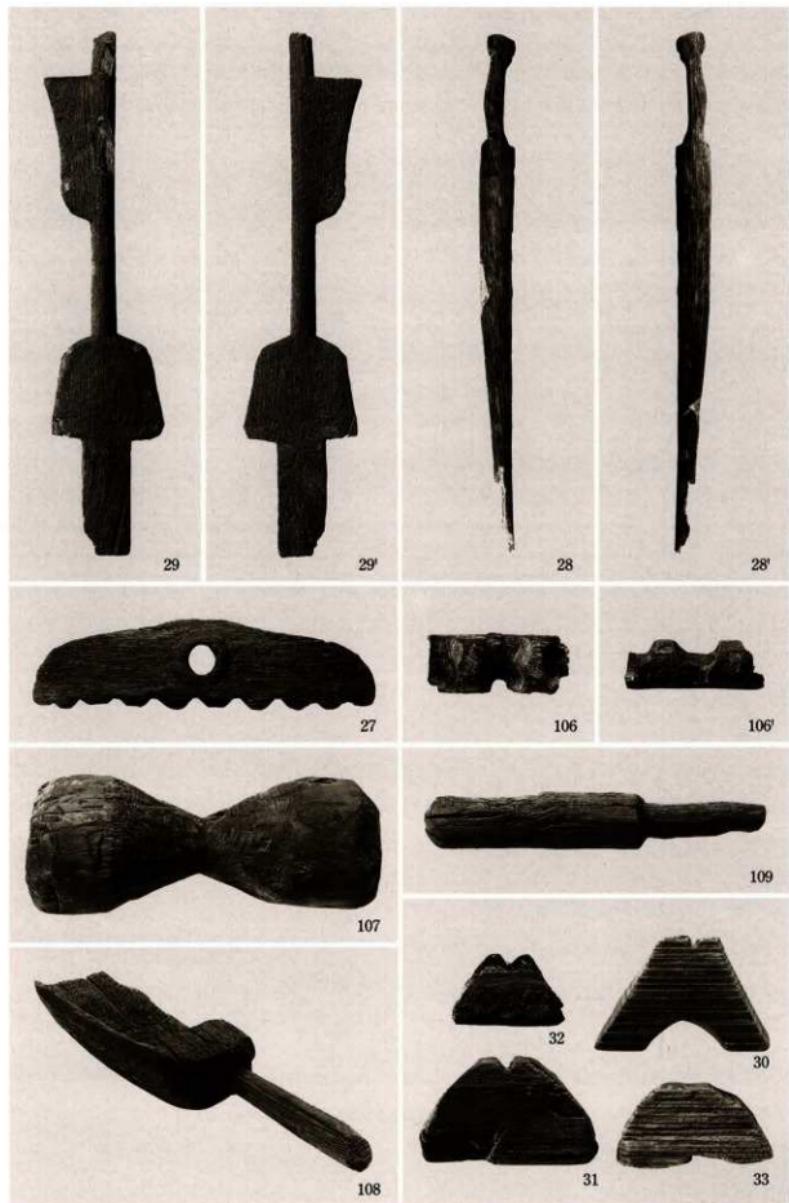
79'



20

製塙土器（18）、土師器小型壺（21～23）、須恵器壺（20）、韓式系土器（79）





たたり (29)、刀形木製品 (28)、えぶり (27)、火鑽臼 (106)
(1.5 / 1)、木鍤 (107)
(1 / 2.3)、模型杓子 (108)、
琴柱 (30~33) (1 / 1)、横柾 (109) (1 / 5.5)



25



25'

a. 輪燈 (25)



26



26'

b. 輪燈 (26)



73

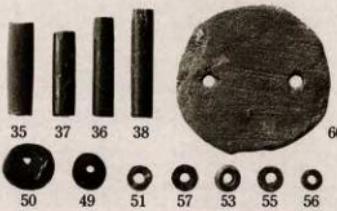
a. ト骨 (1/2.6)



73'



b. ガラス小玉・栗玉・素玉 (39)



c. 管玉 (35~38)、土玉 (49・50)、双孔円板 (60)、白玉 (51・53・55~57) (1/1)



d. トリ (110・111)、ネズミ (112)、馬歯 (113)、イノシシ (114)、e. 馬蹠骨左 (125)・基節骨 (126)・中指骨 (127)・末節骨 (128)・上腕骨 (129)・シカ (115)、サカナ (116~121)、サメ (122~124) (1/1.4)



133

讚良郡条里遺跡（蓆屋北遺跡）
発掘調査概要・IV

発 行	大阪府教育委員会 〒 540-8571 大阪市中央区大手前 2 丁目 TEL 06-6941-0351
発行日	2002 年 3 月 29 日
印 刷	鳳清印刷（株） 門真市柳田町 3 番 2 号 TEL 06-6902-7201

